

たくみ

Craftsmanship

特集 浜田窯の陶器
特集 山陰地方の民藝陶器

第33号

キルギスの映画

「白い豹の影」

キルギスという国がある。中国の西、ウズベク、カザフに囲まれた高地遊牧民の国家だが、天山山脈の真珠と称されるイシククル湖の美しさで知られる。

井上靖が「青き狼」の執筆の際に、この湖のほとりに立つことを切望しながら遂に果たすことのできなかつた、シルクロードの秘境の一つである。

そのキルギスの映画「白い豹の影」(一九八四年製作、八十五年のベルリン映画祭で銀熊賞受賞)を観た。

標高三千から六千メートルにも及ぶ峻険な山々、僅かな草を求めて山麓を走る馴鹿を追って狩人が矢を放つ。時は晩秋。山は間もなく山脈ごと揺れ動くような壮絶な雪嵐に覆われる。

大草原を馴鹿の群れを追って馬を駆る白豹族のある年の冬、獲物が捕れず村人は餓死寸前に追い込まれた。勇敢な若者コジョジャシは仲間を連れ吹雪

と雪崩に苦しめられながら山を越え、中原の豊かな村から、その冬を越せるだけの山羊と馬を借りることができた。自由を求めるその村の族長の第二夫人との恋も交えながら、高原の村々に容赦なく襲いかかる飢饉と争い。そして愛と祭りなども美しく描かれている。

ある年、異族の毛皮商人から元込め銃を手に入れ、馬上から逃げる獲物を撃つ技を知り、馴鹿や山羊の乱獲への道をひたすら歩むことになる。毎年の乱獲によって動物は減り人里を避けるのだが、それでも数多くの馬と銃はより機動的に獲物を追いつめていく。

草原を右左と必死に逃げる馴鹿たち、砂塵で先も見えぬなか、一発の流弾がコジョジャシの愛する息子の胸を貫くのであった。その遺体に取りすがって泣き叫ぶ弟の姿、構わずに続けられる殺戮の風景、話はそこで終わる。

人類の今日の姿を暗示する結末だが、これがソ連支配時の製作と知って、キルギス人の志と勇氣に感動したのであった。

(志賀直邦)

浜田窯について

濱田 友緒

現在、私も浜田窯は四人の職人と一人の弟子、父晋作と私の、計七人で営んでいる。祖父濱田庄司が益子の地に仕事の間を据えて以来三度工房を建て替えているが、昔ながらの窯元の典



花瓶 ¥11,550 花瓶型花生 ¥6,300

型である横長の作業場の窓に向かって蹴りロクロを七つ並べるスタイルは不動だ。

最初に庄司が近在の窯元から移築した作業場は、現在益子参考館内にて当時の姿のままに一般公開している。五室ある登り窯は、春と秋、一年に二回焼成する。益子特産の芹沢石を粉末にして水で合わせた柿釉をはじめ、糠灰、わら灰など自然の原料を釉薬として、五十〜六十年前に掘った益子の良質な土を使って、松薪で焼き上げる。

窯の中には晋作と私の展覧会向けの作品と浜田窯の商品の、三ラインが入る。浜田窯の品は、庄司、晋作、そして私の三名がその時代に合わせてデザインした器を職人に指示して作らせたものをいう。器は民藝の旨に法りシン

ブルな仕上がりである。

庄司は「益子の土は二、三流でもその土をいっばい生かして一流の仕事をする」と、言っていたが、実際使用している感触としてはそんなに悪い土ではないと思う。

当時の益子は歴史の浅いローカルな窯業地で、庄司の言葉には「産地としては未だ二流だが、志を高く持てば一流の仕事となる」という言い含みがあったのではないかと解釈している。

今では陶芸家が約四百人という日本有数の窯業産地となったが、個人作家が多く、昔ながらの窯元の数は減つて来た。民藝の理念である「自然で健康な営み」を維持していく大窯元は年々苦しい状況になりつつあるようだ。

私も浜田窯は今のところ幸いなことに環境も人材も整っており、手作りの良心的な品質は保っている。益子焼が持つ温もりのある優しさを大切に、今後も精進して行く所存である。



ピアマグ ¥3,990 より



急須 ¥10,500 湯呑 ¥3,675 より



取皿 ¥2,310 より



柿釉コーヒー碗皿 ¥6,825
柿釉紅茶碗皿 ¥6,825



そば猪口 ¥3,675



切立水差 ¥10,500 丸型水差 ¥10,500



爛瓶 ¥8,400 盃 ¥3,675



筒型花生 各¥6,300

益子焼のできるまで ―浜田工房にて―(最終回)

島岡 達三

窯詰め

(一) 棚詰め

釉掛けが進捗すると窯太郎の神谷さんは窯詰めを始める。先ず棚の中をきれいにごみを払い、詰めた品物の高台と棚板が焼きつかぬように珪石の粉を一面に敷く。この棚の中に奥のものから品物を詰めていくのである。先ず棚上のものをきめてしまふ。

棚上は背の高いものが詰められる。皿のようなものは、釉を掛ける前に高台の大きさだけ内側に丸く蠟をぬって施釉すれば、其処だけ釉をはじいて素地が出るから何枚も積み重ねてやいても融着(くつつかない)しない。之を蛇の目(め)という。あるいは耐火粘土で小さな団子を作り之を高台に幾つかつけて、その先をとがらして重ねてゆく場

合もある。この団子を目という。この場合、目の当たった処は傷になり之を目あとという。

棚板は始めは平らであるが、長年使用していると徐々にたれ曲ってくる。品物をじかに曲がつた棚板の上のせると焼けて歪むことが多いから粘土で薄い板を作つて敷いてやる。之をせんべいという。角皿や水盤のように底の大きいものは、なるべく棚板の平らな場所に詰める。

このようにして釉の種類によつてなるべく面積の無駄のないように品物がぎつちりとつめられる。大きな品物と品物との間の小さな隙間には盃などが入れられる。

(二) サヤぐみ

棚がきまると次にその前に、サヤと

いつて耐火粘土で出来た入れ物の中に品物を入れ、之を何杯か重ねてつむ。さやには丸ザヤと角ザヤがありたいい無駄のないように、入れる品物に応じて大きさがきめてある。

一番上のサヤは棚板で蓋をして、其の上の上のせと称し強い釉を掛けた大物、主に花瓶類や水盤などがのせられる。サヤとサヤを重ねるには上縁に珪石をぬり、粘土の細い帯に珪石粉をまぶしたものを置いて其の上上のサヤをのせる。こうすればサヤとサヤが地溶けしてくつつく心配がない。之をようかんを切る、という。サヤの中に品物を入れるのは窯の外で二人位で行い、運び良いようにつみ重ねておく。

サヤぐみがすむと窯太郎の神谷さんは窯の中に入り、窯の入り口に助手が一人つく。之を中のことという。中では窯太郎のつめる様子をみていて「台」とか「サヤ」とか「上のせ」とかその



棚積みがほぼ完成した窯の中のようす
(写真は現在の島岡窯の登り窯)

次に必要なものを呼ぶ。呼び声に応じて外でこが夫々のものを窯の入り口まで運んで、中でこに渡す。中でこは之を窯太郎に渡す。濱田先生は上のせの品物を選び出し「之はハナの方でよろしい」とか「之は真ん中の火の強い処へ」などと指図される。

この間に先生は一の間のもの絵付けをされるなど目の回るような忙しさである。それでも先生の絵付けは、穂の長い筆に絵具をたつぶり含ませて、次から次からへと鮮やかに絵付けをさ

れて、みる間にあの特徴ある簡素で力強い絵がつけられて魔法をみているようである。

大体の袖掛けの目鼻がつくと、午さ^{うま}んが一の間の棚をつめに入る。昔は先生が一の間をすつかりつまったそうだが最近はずきさんが代わりにつんでいる。一の間は念入りにつまめるので上の間よりたつぶり時間がかかる。ようやくにして一の間の棚もきまり火前のサヤ組も上のせもきまった。いよいよ火前つみである。之一部屋で窯詰めは

終わるのだ。一の間は戸前もとり、大口の中の灰も掃除し、まわりも片づけるといよいよ大口に火をつける。大口の上には小さな台がこしらえてあつて、火をつける前に神酒と塩を供え、良い窯が焼けるようにと祈りが捧げられる。

窯焚き

大口で最初はとろとろと燃やしている事は素焼と同じである。次第に火勢が強くなると大口の焚き口一杯に薪を放つて燃す。大口の中へも薪を投げ入れる。空気が不足してくるから焚き口の下の風穴の蓋をとる。こうして三十分時間以上燃していると一の間は千度を越え明るい赤色になってくる。益子では焰の色と品物の焼具合で温度を判断し、一切を経験にたよっている。

一の間が黄赤色となると手伝い穴からも投薪し、大口からくべる薪の量もずつとふえる。大口と手伝い穴とを交互にくべて五時間もすると四の間まで火は通るようになる。一の間の火前の



浜田庄司(昭和29年頃)

ものは幾分融けかかっていたりをもつてくる。ここで一の間のかくべ穴をとる。一の間をくべだすと火の利き方は早く、何回かの投薪で奥まで品物はてりをもつてくる。

すでに二昼夜も窯焚きしていて窯焚きの人々の目も血走っている。一の間をくべ始めてから二時間もすると部屋全体は白くなり、色見穴からのぞいてみると一面に品物も壁も白くぎらぎらと輝いている。大部分のものは焼けたようであるが、まだ奥の下と両はながちよつと若いようである。

窯の左半分と右半分とで焼の遅速がでてくる。窯太郎は絶えず窯内を見てそういうずれを調整する。どうしてもはしが焼けぬ時には、薪のたがをはしだけにくべる。最後に窯の側面の後ろの下にある穴の蓋をとって、奥の一番下が焼けたかどうかを見る。この頃になると先生は窯の中をごろんになって「もうくべしたらどうか」とか「もうこの辺でよかろう」とか指図をされる。一の間は焚き上がり際には、二の間のくべ穴の口を切って一本並べに薪をくべる。こうすると一の間は煽はお

さえられて室内の温度が平均してくる。

こうして一の間は焼き上がった。続いて二の間をくべ出す。二の間から上は二〜三時間ずつで焼けてゆく。

二の間が焼き終わると三の間に移る。此の

時期に一の間のくべ穴や色見穴は冷たい空気が入らぬように砂ですっかり目張りをし、また大口の焚き口も徐々に蓋をしてゆく。

四の間も焼き終わると風の入らぬように大口、くべ穴、色見穴などはすべて砂で目張りをし自然にさます。

濱田窯ではたいいてい焚きあがった翌日の午後には窯出しになる。

窯出し

窯出しは何といつても楽しい。一月余りの苦勞が此処に実るわけである。濱田窯では毎窯新しい試みがなされるので、その結果を見る期待、また何時もくり返される手法でも毎窯上がりが違っている。此処に窯の神秘がある。何か計算だけでは割り切れぬものかが働く。

先生は大勢の御客の応対に忙殺されながらも、いとし子を愛撫するかのようにならぬように品物を眺めておられる。工房の人々も熱いのも苦にせず、入れ代わり

立ち代り窯に入つては品物を取り出し
てくる。常連の御客も初めての人々も
皆期待と好奇とで目を輝かしている。

窯出しがすんで一通りの品物の種類
別けが終わると赤絵下地がそろえられ
る。之に先生が上絵をつけられて、上
絵窯でもう一度八百度内外に焼くので
ある。

上絵は酸化焰で直接焰がふれぬよう
にして焼かねばならない。その為窯
の内側に内窯といつて高さも直径も二
尺内外の耐火粘土で作つた筒型の大き
なサヤをしつらえ、其の中に品物をつ
めて蓋をする。品物は上絵付けしてな
い処は触れ合つても差し支えない。外
窯は内窯から二寸内外はなして煉瓦で
円筒を築いたもので上部には蓋はな
い。品物をつめて内窯の蓋をしたら素
焼のかけらで上部をふさぐ。外窯の前
方に一尺角の、長さは一尺五寸位の焚
き口があつて此処で薪を燃やせば焰は
内窯の下を通り、内窯と外窯の間の隙

間をぬけて上の素焼のかけらの間から
出てゆく。焰は真つ直ぐ上を通りぬけ
るので直焰式という。

薪は大割りで焚き上がりは小割りを
用いて五、六時間で八百度内外に焼け
る。焼具合は色見と称して小破片に用
いた上絵具で模様をつけておいたもの
を、針金で内窯の中に吊るしておき、
之を引き出して見る。

濱田先生の上絵はよく土地の味を生
かしたもので現代に其の比を見ない。

上絵窯の焼成も終わり荷出しもすむ
と、濱田工房はまた次の細工に取りか
かる。仕事場をのぞくと陶車の廻る音
以外には人の気配の感ぜられぬ程の静
けさで、仕事に没頭している。(完)

【お詫びと訂正】

前号の誤植をお詫びして訂正いたし
ます。

第三十二号 十ページ 一段十行目

誤 焼成 ↓ 正 着色



象嵌赤絵皿

人間国宝

「島岡達三」展

栃木県立美術館蔵珠玉の三十七点

会期

七月二十一日(土)〜九月二日(日)

会場

益子陶芸美術館 陶芸メッセ益子
栃木県芳賀郡益子町三〇二二
電話 〇二八五(七二)七五五五

幻の箕を探して

田口 召平

木々もようやく芽吹き始めたことしの四月十二日、宮城県黒川郡宮床みやとこ、という所へ一路車で向かった。地図上で知っただけのこの地名は、最も関心を持って探し求めていた箕、つまり「シタッコ箕(サキアリ箕)」の産地として聞きあてていたからである。

四週間前の三月十六日、この日も、



宮城県宮床の箕

幻の箕を求め続けて宮城県岩出山町へ来たが、前日の夕方から仙台地方を中心に記録的なドカ雪に見舞われたため、身動きのとれない羽目に陥ってしまった。敢え無く退散も考えたが、時間が惜しい。町の商工観光課、竹細工指導所、竹細工職人など数ヶ所を尋ね歩き、ようやくにして聞き当てていたのがシタッコ箕の産地宮床という集落であった。この聞きなれない箕とのそもその馴れ初めはこうである。

二十年以上はなろう。秋田県湯沢からの仕事の帰り、沢内甚句で名のある「お米の出ドコ」を見たさに、岩手県の沢内村を北上することにした。

そして、雫石町へ来る途中に紫波町があり、その或る農家から懇願の上譲り受けたのが、威風堂々したくだんのシタッコ箕なのである。

形状が奇異なこと、それに長い間農家と苦楽をともにしただけあって、その色艶は何とも申し分がない。鉛色に底光りする光沢は、その素材がもつ美しさを、数段も格上げした美しさを見せてくれている。

私の追い続けるのはそればかりではない。いかなる職人によって作られるかが、最も知りたい部分なのである。そんなことから、三月十六日の挙に出ってしまった。

ドカ雪が災いをしたか知れないが、岩出山の竹細工職人の須田屋さんから、宮床集落の浅野菊治さん(大正三年生)という箕作り職人を聞き出すことが出来たのである。又、そこには、佐藤哲朗さんという同職の方もいることがわかった。二人の所在を知ったかには、私にとって大の収穫である。

そして、先に竹細工職人から書いてもらった目印つきの地図を頼りに、四月十二日、踊る心をおさえながら、黒川郡大和町宮床の浅野菊治さん宅を訪ね

ることができたのである。

この宮床は、岩出山町から下る国道四五七号線沿いに在り、東北自動車道の古川仙台間とほぼ平行して仙台へ南下している。国道といつても、今はその名をとどめてあるだけで、交通量も激減したらしい。時折り自動車を通る程で、日中は閑散としたたゞすまいだった。その国道沿いの左右には、ほぼ一列に集落が三十戸ほど並び、ほぼ中程の酒屋の隣りの平屋の家が浅野さんのお宅だった。連れ合いのサツさん（大正八年生）は眼鏡をした、ふくよかな感じの方だった。年を感じさせない若々しさが、好印象を与えてくれた。彼女は栃木県の片田舎の農家の生まれ。縁あつて主人菊治さんと結婚したが、間もなく兵役にとられ、横須賀の兵舎のそばに下宿住いすることになった。夫菊治さんは海軍の兵隊として服することになり、すぐさま艦船で太平洋上へ派遣された。

そして、終戦とともに一家四人で夫

の郷里この宮床へ帰つたという。

そこで覚えたのが、この地で古くから伝わってきたスズ竹を主体とした箕作りだったという。地元では、この竹を主材とした日常雑器といわれるザルや籠などは、伊達藩がかつて地場産業として奨励した歴史的経緯があつた。

最初は、近所の女衆の中で廃材として出る桜皮の切れ端を集めて、それでミニの箕の作り方を習つたらしい。手際のいい彼女は、めきめき上達した。そして、そのミニの箕は、本当に面白い程売れた、と自慢げだった。

今は、時間があればつりザルやサキアリ箕を作る程度。近所の「まごころ館」に自分達の作ったものを売つてもらえる売店があり、自分の作ったものが売れることが事の外楽しいらしい。女性が箕を編む、自分でも意外と思つたが、秋田の角館がそうであるように、他でもまだまだ沢山存在するよゆうな気がする。

（箕作り職／秋田市）

濱田窯三代

庄司・晋作・友緒

陶芸の道展

東京展

会期 八月七日(火)～十三日(月)

会場 日本橋三越本店本館六階

美術特選画廊

仙台展

会期 九月十一日(火)～十七日(月)

会場 三越仙台店七階

アートギャラリー

名古屋展

会期 十月二日(火)～八日(月)

会場 名古屋栄三越

七階特選画廊

たくみ歳時記

山陰地方の民藝陶器のこと

袖師窯、湯町窯、牛の戸窯、出西窯

茶人大名で知られる松平不昧公のお膝元だけあって松江をはじめとする出雲地方にはやきものの窯が多い。また茶の湯などの日常の文化的素養も広く、雑誌「白樺」の読者もかなりいて、



湯町窯 花入れ ¥1,680 より

昭和の初めごろには柳宗悦の民藝論の信奉者もふえていた。

昭和七年(一九三二)六月の鳥取のたくみ工藝店の開店にみるように、民藝の啓蒙、生産と普及の運動としては



出西窯 土瓶 ¥13,755 番茶碗 ¥1,470

鳥取、島根の山陰地方がもつとも古く活発であった。その記録の一端を松江在住の民藝愛好家、大田直行の「島根民藝録」(昭和一〇年刊)からみてみよう。

昭和六年一月、柳宗悦はかねてからの懸案であった雑誌「工藝」を創刊すると、精力的に日本各地の民藝探訪に出る。その年五月、柳は大田らを伴い喜阿彌、浜田、布志名、湯町、袖師などの窯を訪れるが、六月には河井寛次郎と共に講演会を兼ねて再訪している。

そして十月には京都大毎会館において「第一回山陰民藝展」を開催している。七年に入って柳たち民藝同人は一月、三月、五月、六月、八月と繰り返し島根の窯や民藝品の作者を訪れ、製品を集荷している。そして五月には大阪高島屋にて「山陰民藝展」を開き、さらに九月には南海高島屋で、十一月には京都高島屋で同名の会を開催して



出西窯 波刷毛目鉢 ¥2,940 より



湯町窯 ピッチャー ¥9,030
片口 ¥9,870



牛の戸窯 染分片口 ¥3,150 より



袖師窯 柿掛分井 ¥3,570
木草丸型鉢 ¥2,415 より

いる。
八年の二月と四月には柳は集荷のためにもまたまた袖師、布志名、湯町ほか産地を訪ねている。そして今度は南海高島屋にて「全国綜合民藝展」を開き、この折袖師焼の尾野敏郎が会場に出張したとある。
九年には、二月に京都高島屋にて「山陰民藝展」が開かれ、十月末からは再び京都高島屋で「山陰展」が開かれ、

この時も尾野が出張した。
そしてこの年十一月十六日からは設立されたばかりの東京たくみの担当で、東京高島屋で「日本民藝品展覧会」が開催された。この会は百五十坪の会場に一万五千点の品が展示されるといふかつてない規模の会で、柳、河井、濱田、バーナード・リーチらの陣頭指揮で陳列されたという。この折山陰からは吉田璋也、尾野、船木道忠、安部

栄四郎らが応援に参加したという。
このように初期民藝運動において、山陰の陶工や作り手たちが運動本部の同人たちと一体となつて活動していたことは特筆すべきことである。
今回ご紹介する山陰の窯のうち、袖師窯は先代尾野敏郎氏から晋也さん、子息の明彦、友彦兄弟に受け継がれ、また湯町窯は先代福岡定義氏から瑠士



袖師窯 柿耳付小鉢 ¥2,310
梅文飯碗 ¥2,310 笹絵湯呑 ¥1,680



牛の戸窯 梅文コーヒー碗皿 ¥3,780
砂糖入れ ¥4,200

さん、孫の庸介君に受け継がれた。また鳥取の牛の戸窯六代の小林孝男さんは、昭和四年、四代秀晴、五代栄一氏の頃から鳥取民藝の指導者吉田璋也医博の指導と後援を受け今日に至る。

出雲の出西窯は本誌第二十一号にも記したが、戦後間もない昭和二十二年に産声を上げた窯である。しかし初代

の窯の同人は先年子息たち若手に窯をゆだねた。

これらの窯はいずれも民藝運動と共に歩み、優れた指導者の助言を受け今日に至った。同じ山陰のやきものでありながら土も釉薬も形も模様も異なつて個性豊かである。これからも素直に、しかし新しい冒険も試みながら精進してほしい。(S)

あとがき

先日、民藝協会の研修旅行で瀬戸内の島々を訪ねた。かつては古代より畿内から西日本にかけての海上交易の担い手であり、戦乱の時には水軍として戦さの帰趨を決する役割も果たした海の民の島である。悠久の時の流れの中心で島々は佇んでいた。

これらの一つ、大崎下島に本土からの鉄橋がかかり自動車での観光客が年に三十万人入ることが予測されるといふ。駐車場もトイレもない。夜、家の鍵もかけない島の人々、町並み保存地区の御手洗町の人達もパニックである。東京でも六本木ヒルズと東京ミッドタウンの間の、竜土町などの再開発の計画を都が認可したという。ゼネコンと都はこの地区を低未利用地とよび、その有効活用をはかるといふ。(S)

発行 株式会社たくみ
東京都中央区銀座八一四一
発行責任者 志賀直邦
電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇一―二三五六五九
定価 六〇円(税込)